

ミニシリーズ：社友の活動を訪ねて

第1回：有機栽培農家として自立をめざす社友の仲間たち

国際耕種に4年ほど所属した社友は、農業を行いたいと退社していった。その後、福岡で合鴨農法を学び、新潟で農業を開始、現在は茨城で本格的に有機農業を行っている。彼が活動している地域は茨城の中でも中山間地に位置している。彼の周囲には有機栽培農家のグループがあり、今回そのグループと意見交換を行う交流会の機会を得た。活動地域の農業の状況を知るために、交流会には農協、市役所の方にも参加してもらった。農家の中には新規参入した若手も含まれており活発な意見交換が行われた。また、一部の農家では海外の農業分野での技術協力を目指す若者の指導を行っている。交流会場は空き家になった古民家である。ここは地域NPOが管理しており、そば打ち、コンサートなどをとおして都会と地域の人との交流の場としても利用されている。広間、土間、いろりの前で話すものありと和やかな中で交流会を行うことができた。交流会では、最初に国際耕種のこれまでの活動を紹介すると共に、これに対する意見や質問を受けた。一方、参加者からは、各農家の営農状況を教えてもらうとともに、農協や市役所などの農家支援、事業なども簡単に紹介してもらった。その後自由討論を行う中で、地域での農業を行う上での様々な問題や課題について論議を重ねた。

参加した農家のほとんどは完全有機栽培をめざしている。また不耕起栽培を行っている農家もいた。栽培の主体は野菜である。各種の野菜をそれぞれ旬の時期に生産・販売している。農家によっては年間50-60品種を生産している。肥料成分の供給は、地域の肥育農家、酪農家から提供される堆肥でまかなわれている。また、ぼかし堆肥の製造、周辺山地からの落ち葉などを利用しながら地力の増進を行っている。その一方で、多くの農家が中山間地特有の鳥獣害(イノシシ、ハクビシン、ヒヨドリなどによる食害)、耕作農地の狭小と分散、手間のかかる除草などの問題をかかえており、今後の耕作面積拡大にとっての課題となっている。有機農家は個別に顧客を開拓し、直接販売や宅配により生産物を出荷している。販売先は茨城県を中心に東京、神奈川周辺へも広がっているが、有機農家グループとしての共同顧客の発掘には至っていない。畜産農家の場合、収入の安定をめざした経営規模の拡大が行われてきたが、最近の飼料価格の高騰が経営の大きな障害となっている。酪農家では乳製品の生産者価格が最小限の上昇に抑えられていることから経営自体の継続を危ぶむ意見も出された。また繁殖・肥育を含め畜産農家共通の課題として糞尿処理が大きな課題となっている。

農協や行政側の参加者からは最近の耕作地の放棄が大きな問題として出された。農家の高齢化に伴い、各所に放棄地は出現していると聞く。これらの農地を農家に紹介したり、耕作者への支援などを行っているが、農地の非耕作化に歯止めがかかる状況にはいたっていない。また、農家支援のための活動としてマーケティングへの支援や販路充実・地産地消への取り組みが報告された。

農家の方々との交流会を通して、有機栽培へのこだわり、地域の農業振興や環境保全、農畜連携による栽培と言った経営の意識の高さを感じた。一方で、自立経営を図りながらの活動にとっては様々な課題もあり、両立の困難性を実感させられる会であった。



交流会風景



国際耕種の活動紹介



交流会準備